

Title	記憶の覚醒と地域づくり：沖縄の都市近郊の事例から
Sub Title	The reconstruction of community by evoking memories
Author	宮下, 克也(Miyashita, Katsuya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.119 (2008. 3) ,p.233- 256
JaLC DOI	
Abstract	In order to address the needs of a low birthrate and an aging population, we need to reconstruct communities that are declining. The purpose of this paper is to analyze, through concepts, such as memory, space and placeless which is coined by Edward Relph, the process of reconstruction of a community in the suburb of Naha City in Okinawa, where there are longtime residents and newcomers. At first, I will analyze on the community the effect of Azashi-making which means the residents compiling historical data into a book by themselves. Secondly, I will treat the young men's association. The association, which temporarily had suspended its activities, started again a few years ago. They revived an old custom, Eisa, which is the dance devoted to their ancestors. The revival involved both longtime residents and newcomers in the reconstruction of a community. They evoked the community's memories by Azashi-making and the revival of Eisa and began to have a special attachment to their community. Put simply, to reconstruct communities, they instilled their memory into the place which has been mixed by both longtime residents and newcomers.
Notes	特集文化人類学の現代的課題II 特集文化人類学の現代的課題II 第1部 空間の表象 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0236

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

記憶の覚醒と地域づくり

—— 沖縄の都市近郊の事例から ——

— 宮 下 克 也* —

The Reconstruction of Community by Evoking Memories

Katsuya Miyashita

In order to address the needs of a low birthrate and an aging population, we need to reconstruct communities that are declining. The purpose of this paper is to analyze, through concepts, such as memory, space and placeless which is coined by Edward Relph, the process of reconstruction of a community in the suburb of Naha City in Okinawa, where there are longtime residents and newcomers. At first, I will analyze on the community the effect of *Azashi-making* which means the residents compiling historical data into a book by themselves. Secondly, I will treat the young men's association. The association, which temporarily had suspended its activities, started again a few years ago. They revived an old custom, *Eisa*, which is the dance devoted to their ancestors. The revival involved both longtime residents and newcomers in the reconstruction of a community. They evoked the community's memories by *Azashi-making* and the revival of *Eisa* and began to have a special attachment to their community. Put simply, to reconstruct communities, they instilled their memory into the place which has been mixed by both longtime residents and newcomers.

Key words: memory, placelessness, reconstruct of community, space

* 慶應義塾大学非常勤講師

I. はじめに

今日的な「つながり」の再構築を図り、全ての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支え合う（ソーシャル・インクルージョン）ための社会福祉を模索する必要がある。

このため公的制度の柔軟な対応を図り、地域社会での自発的支援の再構築が必要である。特に、地方公共団体にとっては、平成 15 年 4 月に施行となる社会福祉法に基づく地域福祉計画の策定、運用に向けて住民の幅広い参画を得て「支え合う社会」の実現を図ることが求められる。

さらに社会福祉協議会、自治会、NPO、生協・農協、ボランティアなど地域社会における様々な制度、機関・団体の連携・つながりを築くことによって、新たな「公」を創造していくことが望まれよう¹。

この言説は、旧厚生省社会援護局の諮問委員会における報告である。少子高齢化社会の到来により、個人の事、家庭内の事とされていた諸事象が公共性のある課題として捉えられ、地域でそれらに対応することが求められている。いわゆる、介護・育児の社会化が必要とされる時代の〈地域〉のあり方を政府が描いたものであり、2003 年に施行された社会福祉法第 4 条「地域福祉の推進」² に法律化されていく。

しかしながら、現在、近代化・都市化の進行により社会構造が大きく変わり、地域社会そのものが崩壊の危機に瀕している状態である。多くの地域では介護・育児を実践する組織も体力もないのが現状であろう。こうした状況下、国や自治体そして社会福祉協議会（社協）³ 等が「地域で福祉を支える力（地域の福祉力）」の育成や「福祉のまち」の構築に取り組む

過程において、〈住民参加〉を呼びかけ住民を福祉サービスの客体から主体へ変換しようとしている。

本稿のねらいは、M. アルヴェックスの「記憶」、E. レルフの「没場所性」といった概念を使って、少子高齢化問題という現代的問題に対応すべく実践されている〈地域づくり〉を捉えることである。政府の唱える〈新しい公〉はあらゆる人々を包摂する母体になうなければならないことになる。現在の混沌とした〈地域〉を分析し、〈新しい公〉を構築するには何が必要とされているのか、何が足りないのかを考えたいと思う。

本稿では過去の出来事を「歴史」でなく「記憶」という概念を用いて考察することにする。その理由は、「歴史」は客観的に存在する過去として認識される傾向が強いのに対して、記憶は個人であれ、集団であれ、当事者たちが主観的に認識するものであるからだ。また、記憶は「記憶を失う」や「記憶を呼び起こす」といった具合に動詞を伴うことにみられるように、何かしらの契機が支点となり想起されたり、時に忘却されたりする。こうした記憶の持つダイナミズムという特性を活かすことで、固定化されない過去を表すことができると考える〔宮下 2001〕。本稿では、場所に対して個人あるいは集団が「持つ」・「呼び起こす」記憶を通して、〈地域〉を考えたい。

II 字・公民館

1 沖縄県 A 町 C 字

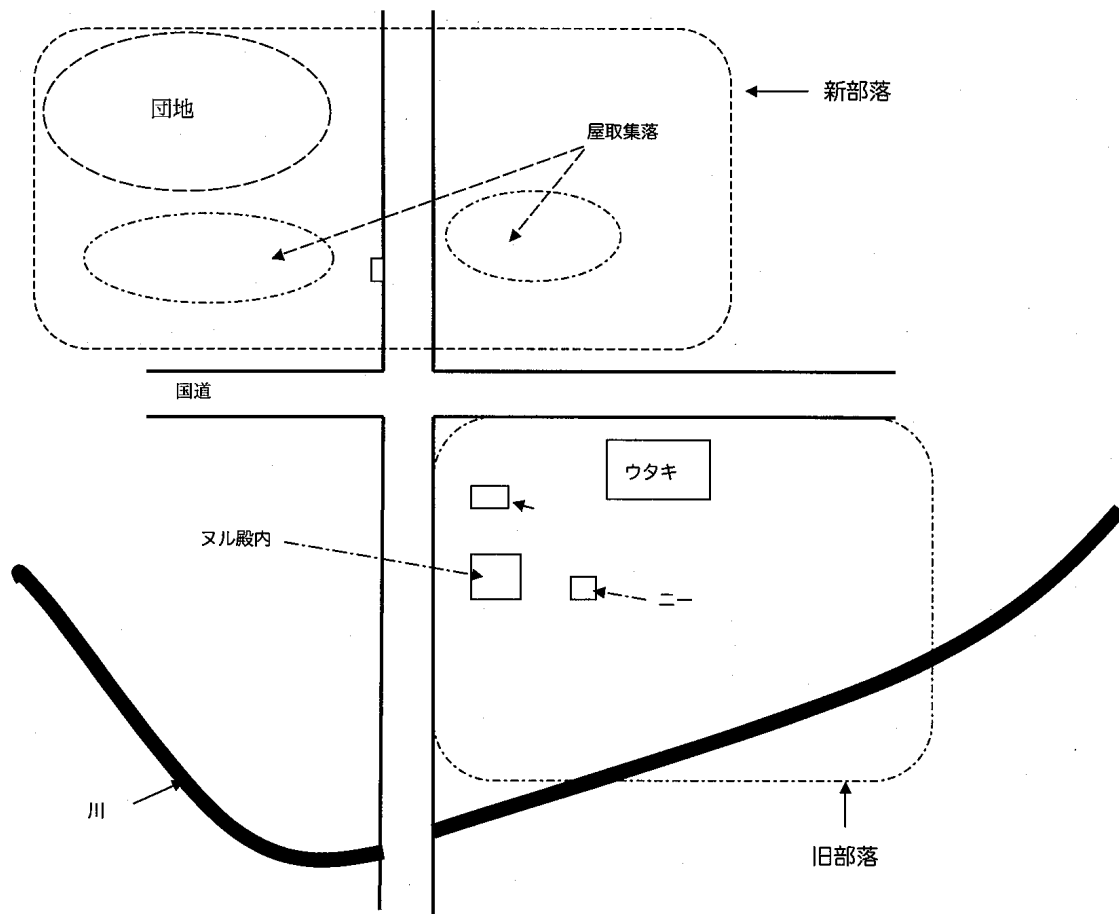
かつて沖縄において地縁・血縁で結ばれた地域の単位であった「シマ」あるいは「ムラ」は、現在、「字」あるいは「区」となっている。この字が複数まとめられたものが市町村制における町村になったのであり、字あるいは区が行政の基本単位と考えることができる。しかし、これは「単なる行政組織の下部単位にとどまらず家族を越えた〈生活母体〉」といった性格を持っている〔北爪 2000:78〕。字は、字の共有資産として共有地や共

有林を持ち、後述する「字公民館」を設置し区長、書記などを雇用しているなど、他都道府県の地域とは比較できないほどの独立性・自立性が高い自治組織である。

本稿の対象となる C 字は、沖縄県那覇市に近い A 町を構成する字（行政単位）の一つで那覇市のベッドタウン化しつつある。戦前は全体で 100 戸余の集落であった。集落の中心部の北部一帯は平原あるいはサトウキビ畑であったが、昭和初期から旧士族たちが移住して来て屋取（ヤードゥイ）集落⁴を形成した。そして、さらに 1980 年代からは団地が建設され、民間の住宅供給会社による宅地造成が行われ分譲された。その結果、C 字は 2005（平成 17）年現在で、1,651 世帯、人口 4,923 人（男が 2,426、女 2,497 人）まで拡大した。

字住民は、戦前からある集落を旧部落、そして屋取集落と新興住宅地のあたりを新部落と、字空間を二つに分類し認識している。旧部落には、根（ニー）と呼ばれる集落の草分け的な門中⁵があり、それが宗家（ムートゥヤ）となり多数の分家を抱えている。そして、その後にさらに八つの門中が近隣地域から移住して来て、それぞれが宗家となり、やはり多くの分家を抱えている。この草分け的な門中の宗家とその分家、そして遅れて移入して来た門中とその分家で旧部落を構成しているが、村拝みの際に餅水を備える序列は門中の「草分け」度が基準となり、また、その基準から拝所によっては餅水を供えることのできる門中とできない門中に分類される。現在もこうした慣行は実践されており、祭祀空間と記憶の中では門中の秩序が優先されている。

また、沖縄では戦前から戦後間もない頃まで、婚姻規則による部落内婚⁶の慣行があり、この旧部落でも例外ではなかった。それゆえ、シマ、すなわち旧部落は、ある意味において非常に閉鎖的で緊密な空間であり、各字で微妙に言葉のアクセントの違いがあり、言葉から字の人々は互いの字が分かったと言う。



[図 C字の空間]

新部落は、前述した屋取集落と近年の社会移動による 1980 年代以降の新興住宅から構成されている。新興住宅においては、分譲住宅の住民と賃貸アパートに暮らす住民がいる。新部落は、C 字全体で 1,651 世帯（2005 年現在）のうちおよそ 700 世帯を占めている。

新部落の人々は旧部落の住民から「道向こうの人」と呼ばれる場合がある。この「道向こうの人」は、自治会⁷の「評議委員を経験して初めて一人前になれる」と言われている。

ただし、評議委員になるためには家を建てて 3 年以上居住すること、すなわち、永住化が前提となっており、実際に評議委員になろうという積極的な意志を持つ者はほとんどいない。

この C 字においても少子高齢化が進んでおり、特に高齢化に関わる問

題は深刻化している。高齢者をケアするボランティアの不足が緊急を要する問題となっている。例えば、かつてはPTA役員経験者が、婦人会の役員を務め、その後に民生委員になってボランティア活動をするという「お決まり」のパターンがあったが、現在は、その婦人会（女性会）自体が消滅しており、民生委員は欠員状態が続いている。旧部落では若い者がA町の外や県外に転出する傾向が強く高齢者世帯が多く、他方、新部落の団地やアパートには若い家族や夫婦が多い。こうした状況下で、字や社会福祉協議会は、地域における福祉ネットワークの構築を試みているのである。

2 「中心」としての字公民館

沖縄には社会教育法に位置づけられた「公立公民館」と字（集落）の住民自治活動の拠点としての「字公民館」の2種類が存在する。戦後、琉球政府の財政状況では社会教育施設の公立公民館を建設するのは困難であった。そこで、社会教育担当者は、ムラヤー（村屋）に「公民館」の看板を掲げた。これが、字公民館の始まりである〔上地 2003, 小林・平良 1988〕。ムラヤーとは、琉球王国時代の村を管理するための末端の行政機構あるいはその建物のことを言う。ムラヤーの近くには広場と拝所があり、「生産、消費、子育て、相互扶助、福祉、納税、自警、祭祀等」を担っていた〔小林 1988〕。ムラヤーは、住民が自前で建設し運営していた。

C字の公民館は、琉球王国時代の茅葺の村屋から、明治期にはアマダイ（雨垂れ）瓦屋の字事務所となり、大正期には瓦葺木造に変わった。そして、戦後、1957年（昭和32）に公民館となった。公民館の建設事業では、積立金や寄付金その他、製糖工場跡地やモー（野原）等の字所有地の売却金が主な資金となった。すなわち、昔からの住民たちが自らの資金で公民館を建設し、そして自治会費等で運営しているのである。現在でも、字公民館は字の中心ではあるが、かつてほどの求心力はない。しかしなが

ら、沖縄には「太陽は東からアカガラチ、村の栄えは公民館からウクチ（太陽は東から登り、村の栄えは公民館から起きる）」という言葉があり、現在も〈地域づくり〉の中心として期待されている。

III 場所の記憶の覚醒

1 字誌づくり

(1) 経過

地域社会の歴史や生活（生業、家族・親族、信仰、年中行事、人生儀礼など）を記したものには、県史、市史、町史などがある。こうした刊行物の制作にあたっては、研究者などの専門家集団が担当するのが一般的であった。これに対して1980年前後から沖縄には「字誌」づくりが広がっている⁸。これは、字という小さな行政単位のものであり、その字に生まれ育ち今住んでいる人々や出身者たちがその制作作業を担ってきた。素人集団の手弁当による協同・分担作業で取り組まれ、字誌は自分を含む現代と将来の地域住民に向けて創られたものと考えられている。こうした地域住民自らの字誌づくりへの積極的参加が、自らの地域の歴史や文化の再評価につながり、さらに地域活性化につながるのである〔中村1990: 90-91〕。

C字でも1994年（平成5）に区民常会で「戦前、戦後の激動の中に生きた生活、文化、歴史を記録して子孫に残すため」に字誌の制作が決議された。「極力、字民の力で」をモットーに編集委員36名は字の長老たちから聞き書き調査を実施し、毎週土曜日に編集会議を開催し作業を進めた。そして、13年後の2007（平成17）年に字誌が刊行された。編集委員の特徴は、歴史学や民俗学の専門家ではないこと、発足当時より中高年者であったこと、そして新部落からの参加者はいなかったことが挙げられる。編集委員は、長老たちとのコミュニケーションにより自分たちの祖先の歴史や文化を知り、自らを地域の歴史の中に位置づけることができた。

また、かつては住民がいないモー（野原）だった新部落に出向き、自分たちとは縁がなかった新住民たちの生活を聞き書きし、新部落も同じ字であることを認識したと言う。このような意味において、字誌づくりは「地域づくり」における一部の住民に字の記憶を覚醒し、字へのアイデンティティの再確認や字空間の再認識に貢献したと言えよう。

(2) なぜ「字誌」をつくるのか

ここでは、専門家に委ねるのではなく、自らの手で過去を掘り起し「字誌」をつくるのが何を意味しているのかを考えてみたい。

社会学者のモーリス・アルヴァックスは、記憶は過去の再構築であり、現在の精神的要請によるものだと指摘している〔アルヴァックス：1989〔1950〕〕。浜日出夫は、アルヴァックスの集合的記憶論を引用し、記憶を次のように定義している。

記憶とはほとんどあらゆる人々が過去に関して抱く知や思いの出来事の中から、現在の想像力に基づいて特定の出来事を選択し呼び起こす行為、表象を媒介とした再構成の行為である。記憶とは過去の出来事の単なる貯蔵としてではなく、現在の状況に合わせて特定の出来事を想起し意味を与える行為として理解されなければならない。それゆえ、記憶はその担い手である現在に生きる人間、そしてその人間が所属する様々な集団のアイデンティティと本質的に絡み合っている〔浜 2007:8-9〕

記憶の担い手である現在の字の住民が、多数の過去の事象の中から何を想起し、どのような意味を与え再構成するのだろうか。字誌の編集主幹は字誌の冒頭で次のよう記している。

去る大戦で尊い人命と共に有形無形の歴史遺産を失いました、その

上、都市化や開発によってムラの姿をかえつつ過去と現在が激変していく情勢下にあります。その狭間はムラの現在と未来を考える手掛かりを失うことを意味します。そこで、時代を逞しく生き抜いて来られ、古きを語れる先輩たちの知恵をお借りしつつC字の昔、今、未来を模索したい。そこで字誌を編集する必要があります。

(下線部：引用者)

この言説のとおり、戦争や社会構造の変化により大きく変貌とげる字の住民が、「字誌」を必要としたのである。

では、「県史」や「市史」のように、なぜ「字史」でなく「字誌」であるのか。「字誌」は、浜の言うところの「単なる過去の出来事の貯蔵」ではなく、現在の生活において意味を持つ〈選ばれた＝想起された〉記憶なのである。384頁からなる字誌は、8章から構成されている。最も分量が多いのは、「村のおいたち」の章の「門中」の節でおよそ50頁、次に多いのが「沖縄戦」の章でおよそ40字頁である。旧部落の住民を中心とした編集委員たちは、地域の紐帯の崩壊の原因として門中結合の衰退と戦争を考えているのである。特に、「沖縄戦」という章が「字誌」という存在の意味を象徴している。この章では「字民の非難」の様子を鮮明に描写し、すべての「戦死者」の氏名、門中屋号、生年月日、死亡場所、身分(軍人/一般住民)、そして死亡年月日を詳細に記述している。彼らにとっての戦争は、中央の「正史」や歴史研究者などの外部者に記述される「第二次世界大戦」あるいは「太平洋戦争」ではなく、あくまでも自らの経験としての「沖縄戦」なのである。

アルヴェックスは場所と記憶の関係について、「場所は集団の記憶の刻印を受けており、あらゆる集団のあらゆる歩みは空間の用語によって表現することができるし、集団の占有する場所はあらゆる用語の集合にはかならない。この場所の一々の様相、一々の細部はそれ自体、集団の成員にしか

理解できない意味を持っているのである。」と述べている〔アルヴァクス 1989 [1950]:167〕。すなわち、字誌づくりとは、外部の歴史学者には理解できない、字の各場所の持つ意味を、現在の字の人々が必要に応じて再構成する作業に他ならないのである。そして、字誌とは彼らの記憶であり、正史とは異なる自らのもう一つの歴史と呼びうるものである。

しかしながら、この字誌あるいは字誌づくりの事業は、これからの地域を背負う若い世代に対して直接的な影響が大きかったとは言えない。沖縄本島北部で「字誌づくり」を推進している中村誠司は「字誌をつくる目的は自分たちと明日の地域を担う後輩たちに設定されている」と述べている。そして実際に本島北部のある地域では編集事務局に青年たちが参加し、そして子供たちのための地域文化財巡りを実施している。字誌を手に場所を「巡る」という行為を実践することにより、子供たちは地域の記憶を追体験し刻印することになる。ここに「字誌づくり」から「地域づくり」へという実践的な発展を見て取ることができる。C字が「地域づくり」をより活性化させるには、未来を背負う若年層を包摂する必要がある。彼らに地域の記憶をいかに刻印するのかが字誌刊行後の重要課題となる。次に若者が字誌を読んだり、年輩の人々から話を聞き字の字の記憶を喚起する姿を紹介する。

2 青年会の再結成

2000年（平成12）に活動が停止し、実質上、解散状態にあった青年会が復活した。第2次世界大戦前は、青年団と呼ばれ、中学を卒業すると字の男子全員が入団し、26歳で退団することになっていた。当時は中学を卒業すると皆が農業に従事し高校に進学することがなかったので、青年団の20歳以上の者が「青年学級」を主催し読み書き・算盤・社交術などを教え、青年団はいわば「高校」の役割を担っていた。加えて、退団までに綱曳きや棒術そしてエイサーといった伝統的な芸・技術を退団した「先

輩」たちから学び身につける必要があった。また、公民館の仕事の手伝い、青年図書館の事務・運営、そして字の行事の運営など字を運営における実動部隊でもあった。

戦後、青年団から青年会と名称が代わるとともに、その活動は漸次停滞し、そして1991年（平成3）に記録上青年会は消滅した⁹。活動停止の最大の原因は、社会構造の変化である。かつてはこの字の生業は農業であり、農業に関連する豊穰祈願や雨乞い儀礼などは青年会が中心で運営していたが、農地を手放す住民が増え、このような行事が盛んではなくなっていった。また、農業を営んでいた時代には融通のきく時間があったが、青年たちがいわゆるサラリーマンになると自分の自由になる時間がほとんど持てなくなってしまった。

しかし、前述のとおり青年会が再結成され活動を再開した。特にここ2、3年は本格的に活動している。現在の会長・大城譲治（23歳）さんは、再開した青年会の3代目会長であり、1代目と2代目は既に退団している。現在29歳である1、2代目会長が8年前に青年会を復活させたときに参加したメンバーで最年少だった者が現会長である。彼らは、沖縄市で毎年開催される「全島エイサー大会¹⁰」で各地の青年会がエイサーを勇壮に踊る姿を見るにつれ、自分の字でエイサーが行われていないことに疑問を持つとともにエイサーを踊ることに憧憬の念を抱いたと言う。再結成時のメンバーは、皆旧部落の住民であり、幼少時からの遊び仲間とその兄弟であった。彼らは「エイサーをやりたい」一心から青年会を再組織化し、毎年夏休みの最終土曜日に字が主催する夏祭りの出し物としてエイサーを上演するために週1回の練習を開始した。また、それまでの夏祭りは、年輩の女性を中心に構成される民謡クラブや琉舞クラブの発表会的な要素が強く出店等もなかったが、青年会が資金調達に駆け回り、出店で焼きそばや焼き鳥を扱うようになった。青年会のおかげで「夏祭りらしく」なったと語る字の区長は、青年会が資金調達に方々に走り回ってくれたおかげ

で夏祭りの宣伝にもなった、そして出資者が実際に祭りに足を運んでくれるようになり参加者も増えたと述べている。

そして、2007年（平成19）現在の青年会は、16歳から23歳までの10人で構成されており、やはり、いずれも旧部落の住民である。活動内容は、これまでの夏祭りの出店及びエイサーの上演、そして新たに盆に行う道ジュネーが加わった。

3 道ジュネーによる記憶の覚醒・再創造

C字では1930年代まで盆の13日に祖霊をお迎えするウンケーから16日に祖霊をお送りするウークイまで4日にわたり旧盆行事が行われていた。16日の夜遅く各戸のウークイが終わってから青年団による道ジュネーが行われた。一般的には、道ジュネーとは、エイサーを踊りながら道を練り歩き各戸を回り、ウヤファーフジ（親祖先）供養と繁栄の願いを込めて念仏踊りを捧げるものである¹¹。しかし、ここC字では、各家に入り仏壇の前で「仲順流り（チュンジュンナガリ）¹²」など2曲ほど歌って供養するだけで、そこではエイサーを踊ることはしなかったと言う。

当時、踊り手は前後2段構成で、前列には15～26歳までの青年、後列には27歳から45歳までの中年を配置し縦三列になり横に肩組をしてジウテー（地謡）¹³のサンシン（三線）、テーク（太鼓）、カニ（鉦）の伴奏に合わせ歌いながら行進した。道ジュネーの道順は、ノロ殿内からアガリマーイ（東廻り）で各戸を回り夜が明ける頃に村屋に到着した¹⁴。村屋の前の広場では、邪気を払うための棒を演じ、最後にここで初めてエイサーを踊ったと言う¹⁵。

この道ジュネーは約70年にわたり中止されていたが、2007年（平成19）夏に青年会によって再開された。昨年まで夏祭りの演目としてのみ踊られていたエイサーを「本来のもの」として盆行事で上演してみたいと青年会が考えからだ。青年会のメンバーは、まず以前行われていたエイ

サーについて、70歳を超える「先輩¹⁶」たちに話を聴くことから始めた。しかしながら、当時のことを記憶している者は少なかったが、先輩たちの話や字誌から分かったことは、前述の踊る際の形態や曲目くらいであった。10人という彼らの人数では「昔どおり」の隊列で練り歩くことは不可能であった。しかし、もともと彼らにとっての「本来のエイサー」は、エイサーが盛んな沖縄市の園田^{そんだ}青年会のエイサーであり、目指すべきエイサーも園田のそれであった。彼らが青年会を再開させて大きな理由の一つが「エイサーをやりたいから」であった。園田青年会は独自のホームページ¹⁷を開設し、そこで自らのエイサーの映像や道ジュネーのコースを公表しており、C字の青年会のメンバーはこのサイトを通してエイサーの勉強をしてきた。彼らの意識は、旧来のエイサーそのものの再現・復活というよりは、それをベースに自分たちにとって「カッコいい」エイサーを作り上げることである。

青年会は、3名の先輩たちにサンシン（三線）の伴奏を依頼し、彼らの練習にも付き合ってもらった。彼らがエイサーの曲として選んだものは、従来の「仲順流り」の他に沖縄出身のポップスグループ BEGIN やりんけんバンドの曲であった¹⁸。園田青年会のエイサーを映像で学んできた（マネてきた）彼ら青年会は、道ジュネーをやるにあたり自分たちのオリジナリティを模索した。そして見つけ出したのは字の「旗」であった。ふつう、エイサーで用いられる旗は高さ3～4メートルで、地域の名が記されており、旗頭^{はたがしら}が先頭に立ち持つことになっている。彼らは、昔の旗についてサンシン担当の先輩に尋ねたが、先輩たちもその記憶がなかった。その先輩たちが今度は彼らの先輩たちに尋ねるといった具合に進み、最終的にデザイン、色、大きさなどのイメージが浮かび上がり、実際に青年会が自ら制作することになった。字の先輩たちの中には、字の旗は道ジュネーの復活以上に嬉しかったと筆者に語る者もいた。

彼らは、道ジュネーのコースを選定するにあたり、すべての家を回るこ



写真1 先輩の指導を受ける青年会



写真2 夏祭りのエイサー

とは実質的に府不可能であるため、道ジュネーの考え方を抜本的に変えることにした。彼らは、はじめに旧部落のノロ殿内とニーと呼ばれる草分け的な門中の宗家の前で、その後トラックで新部落の団地に移動しエイサーを実演し、そして最後に公民館前の広場でそれぞれエイサーを実演した。

現在の青年会の道ジュネーとかつてのそれには、二つの大きな差異がみ

られる。一つには、かつてのように練り歩くというやり方ではなく、四つの地点でエイサーの実演をする形をとったこと、そしてもう一つは、かつては旧部落内のみで行われていたが、新部落もその対象地域としたことである。青年会のメンバーは最年長にあたる会長でさえ、1984年生まれの23歳で物心がついた時から新部落の場所には既に住民がいた。そして、団地や屋取集落の子供たちと同じ小学校・中学校に通学していた。彼らの中には新部落・旧部落の分類はさほど明確なものではない。それに対して、1996年に行われた同字の調査報告書には、両者の対立図式が明確に記述されている。また、筆者自身の実感としても年輩の住民になればなるほどこの分類認識は強い傾向にある。年輩の者にとって新部落の地は屋取集落を除きあくまでも自然の「モー（野原）」であり、あるいは彼らが耕した畑地としての記憶でしかない。他方、現青年会のメンバーにしてみれば、その地は彼らが生まれた時からC字の居住空間であるのだ。よって、彼らは違和感を抱くことなく新部落でも道ジュネー行っただのだ。

4 屋取集落と新興住宅地

C字においては1970年に入るまでは旧部落民にとって、国道を越えた「道向こう」呼ばれる地域は畑や野原が広がる非居住空間であった。ただし、屋取集落は例外であり、首里にムトゥヤー（宗家）を持つ貧窮士族が寄留し集落を形成した。しかし、彼らにとってみればC字はあくまでも仮の宿りであり、いつかは再び戻ることを励みに生活していたため、この地区に首里の宗家を拝むための遥拝所以外にその土地に根づいた拝所は存在しない。C字の屋取集落の始祖であり、また琉球王国の英雄である護佐丸を始祖とする首里の豊見城殿内¹⁹の流れであるI門中の女性（1926年生まれ）によると、清明祭、ウマチーなどの年中行事は基本的には首里のムトゥヤーに御願に出かけていたのでC字の行事にはほとんど参加していなかったと言う。

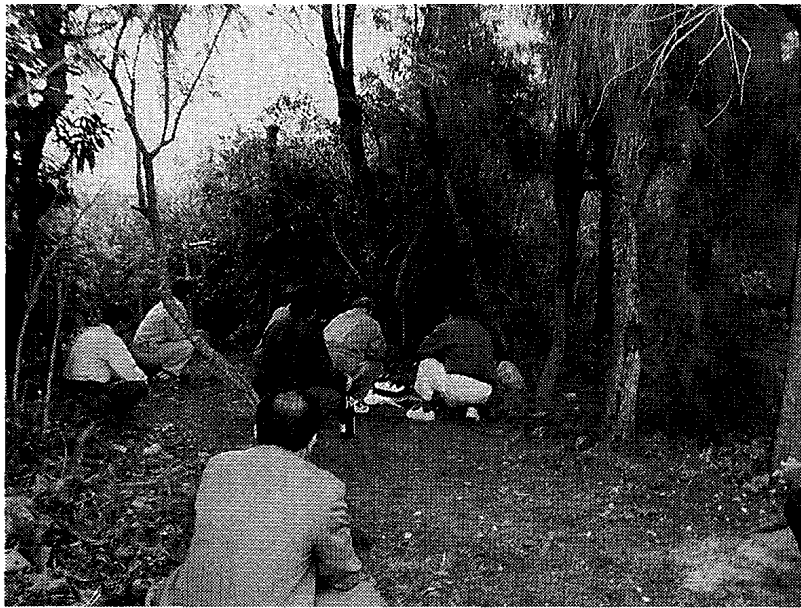


写真3 ハチカソーカチの様子

伊藤幹治は沖縄の門中の特徴に、始源志向性 (origin directed) をあげている [伊藤 1980:30]。沖縄の門中は、自分たちの門中の先祖、さらに先祖、さらにその先祖…という具合に、先祖の出自の原点を遡って求めるという志向性を潜在させているのである [喜多村 1988:11]²⁰。このような門中の始源志向性ゆえ、屋取集落の住民はいつまでも「仮の宿り」状態が続きC字へのアイデンティティは生まれてこない。屋取集落だけでなく、新興住宅地に新たに転居して来た住民も主要な年中行事には夫の門中に行く傾向が強い。他方、旧部落はニーと呼ばれる門中や先住の門中からの多くの分家から構成されているが、これらニーや先住の門中の始源志向性が旧部落の強固な一体感を生み出しある種の閉鎖性あるいは排他性を醸し出して来たとも言える。字活動の中心である公民館館長兼字の区長及び評議員は主要な年中行事には字内の各拝所を字の代表として参拝する。例えば旧正月行事のハチカソーカチでは下記のとおりである。

【ハチカソーカチ (二十日正月)】初御願

ハチカソーカチまでの大安を選んで、区長と評議委員が字の繁栄と人々

の健康、農作物の豊作を願い、ノロ殿内、ニーにあたる門中（字の創始者とされる者を始祖とする門中）、御門口（ウジョーグチ：御嶽の入口）を拝む。

こうした字の年中行事も「始源志向」の一つの現れである。字の区長や評議員は御嶽やニーとなる門中や御嶽などの聖なる空間を巡拝することで部落の祖先の記憶を喚起し、ある種の自己確認作業を行っている。他方、新部落の住民たちは字外に〈始源〉を求めるのである。

5 意識を覚醒する音

新部落のアパートに夫と2歳になる子どもと暮らすHさん（1974年生まれ）が8月末の字公民館の夏祭りにやって来た。彼女は広島生まれの広島育ちだが、旅行で沖縄に来てからいわゆる「沖縄病」にかかり那覇市に移住した。沖縄県南部出身の男性との結婚を機に現在のアパートに暮らすようになった。子どもが生まれてから「ママ友」を作りたいと字公民館で週1回開催される「子育てサロン」²¹に顔を出すようになった。それまで旧部落に入ることはほとんどなかったと言う。現在の住まいはあくまでも「仮のすまい」であり、年中行事の際も夫の実家に帰るのでC字に対して関心は抱いていなかった²²。

しかし、夫の実家の盆に初日だけ参加し帰宅したところ、8月27日に太鼓の音が聞こえて来た。青年会の道ジュネーであった。家から出て家族3人で彼らの勇壮なエイサーを見て興味を持った。もちろん、彼女たち家族はエイサーを以前にもテレビやエイサー大会などのイベントで見た経験はある。沖縄病にかかったヤマトンチュのHさんにとってエイサーは「沖縄らしさ」を表象するシンボルである。家の近くで実演されたエイサーの「太鼓の音が身体にズンズン来た」ことによって、彼女は地域に少し興味を持つようになったのである。彼女は9月1日の字の夏祭りに青年会がエイサーを実演することを知り、初めて字の行事に参加した²³。

このHさんの話は何を表しているのだろうか。新・旧部落の区別を認識しない青年会の新しい形の道ジュネーがHさん家族の何かを覚醒したのである。

6 没場所性と始源志向

ここで地理学者のエドワード・レルフ (Edward Relph) の「没場所性 (placelessness)」という概念を用いてC字の空間を考えてみたい。レルフは『場所の現象学—没場所性を越えて』[レルフ 1999]において、現象学的立場から「場所」は経験されるものとした上で下記の四つの視点から場所が経験される多様さを示している。

- ① 場所の経験とその概念の広がりを示すために、空間と場所の関係を検討すること、
- ② 場所の経験の様々な要素やその濃密さが探求され、人々と彼らが生活し経験する場所との間に、深い心理的なつながりがあるということが論じられる、
- ③ 所のアイデンティティと場所に対する人々のアイデンティティが分析される、
- ④ 場所や景観が作られる時、場所のセンスや場所への愛着がどんな形で現されるのかが説明される。

そして、この著書の中で最も興味深い概念が「没場所性 (placelessness)」である。没場所性とは、「外見ばかりか雰囲気まで同じようになってしまい、場所のアイデンティティが、どれも同じようなあたりさわりのない経験しか与えなくなってしまうほどに弱められてしまうこと」である。そして没場所性は「個性的な場所の無造作な破壊と、場所の意義に対するセンスの欠如がもたらす、規格化された景観の形成」によって起こ

る。また、没場所性は単に「意義のある場所をなくした環境と、場所の持つ意義を認めない潜在的姿勢」のことでもある。それは、「根^ルも^ト」を断ち、シンボルをむしばみ、多様性を均質性に、経験的秩序を概念的秩序に置き換え、場所の根源的なレベルにまで達するとする。

レルフは、われわれが場所との密接な関係から「根^ルなし草^{トネス}」へと転換してしまうことに危機感を募らせ、こうした没場所性に抗するものとして、場所のセンスの再生を訴えるのである。「場所のセンスは本質的に科学の対象以前のものであり、相互主観的」であるので、現在でも再生は可能だと考える。それには、場所への深いかわり、場所への愛着、そして「場所と私たちの場所経験の特徴と本質が何であるかを知ること」が必要だと言う。

前述のとおり、新部落に住むHさんは現在の住まいを「仮の住まい」としかとらえず、字に関わろうとしない「根なし草」ではあったが、もともと沖縄好きのヤマトンチュであり、沖縄という、より大きな地域にアイデンティティがなかったわけではない。夫の実家の年中行事にはむしろ積極的に参加していた。しかし、青年会の道ジュネーを契機に字に関心を抱き始めた。

画一的な新興住宅やアパートが広がる新部落は、昼は字外で仕事をし夜に寝に戻ってくるベッドタウンで、均質的な団地や戸建て分譲住宅地ある。かつては、サトウキビ畑が広がり、そこで旧部落の住民が畑仕事に精を出していた頃は、場所と住民の関係は深かった。しかし、現在はレルフの言う没場所性の進んだ場所となっている。しかし、その場所に字の旗を掲げエイサーを踊ることによって、青年会は図らずも没場所性の新部落に場所性を吹き込む企てとなった。字の記憶を刻印したのである。

他方、同じ新部落にある屋取集落の住民もC字の中では根なし草である。いずれは首里に戻るという門中の始源志向性が、常にC字への根を断ち切り続けた。しかし、この志向性は沖縄という大きな地域において

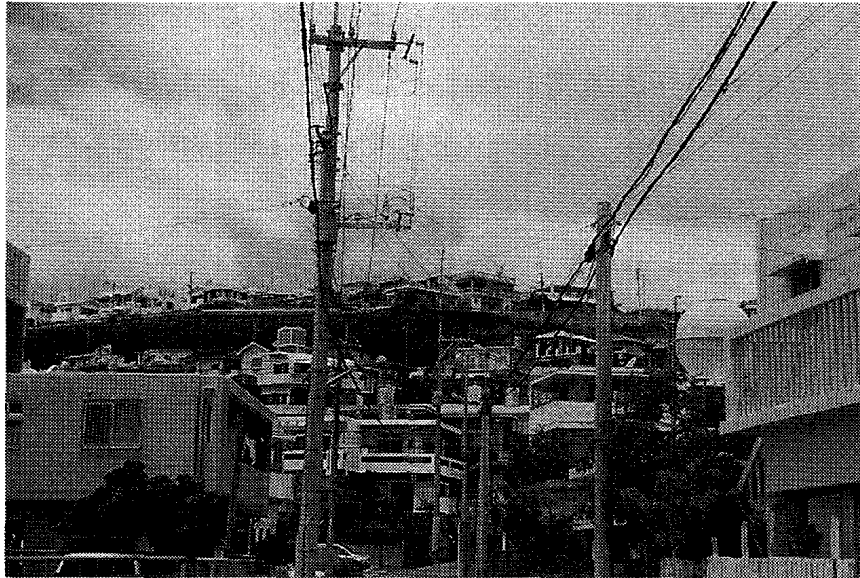


写真4 新興住宅地

は、しっかりと根をおろしているのである。

ここで、注目すべきは、「沖縄」という地域である。青年会の再結成の動機は、「全島エイサー大会」への参加を目指すためであり、Hさんもうゆる沖縄病であり、旧部落の門中や新部落の屋取集落の門中も琉球王国につながる始源志向性を有している。このような意味において、沖縄は各人が何かしらの場所性を感じる地域であると言える。

IV 結語

少子高齢化時代に向けて、いかに「地域」を再構築していくのか。いいかえれば、人が場所に関わっていくのに必要なものは何か。それは、場所にアイデンティティを持つことであり、また、そのためには場所性のない (placeless) 場所に感覚/意味 (sense) を与えることが必要である。

場所にアイデンティティを持つための企てとして、前述の字誌づくりが挙げることができよう。字誌づくりとは、地域の空間に刻印されている記憶の喚起と再構成、そして未来への世代に伝える行為である。将来の地域を担う子どもたちが、字誌を手にして字を巡る行為〔中村 1990〕は、感

覚/意味を持つ場所を巡ることで場所を経験し場所の記憶を自らに刻印することを通して、場所へのアイデンティティを持つことを可能にさせる。

また、思いつきで始まるC字の青年団の活動が他方面に刺激を与えていく過程から、〈地域を捉える〉あるいは〈地域を構築する〉にはホーリスティック（全体論的）な視点が必要であるといえよう。そして、個人が経験する「地域」は、非常に多層的であり文脈依存的である。共同体の記憶を研究する小関隆は、共同体の内部にはより細分化された複数の「記憶の共同体」が併存していることを指摘している（小関1999:8）。字という小さな記憶の集団が、同時に「沖縄」という大きな記憶の集団に包摂される場合がある。「地域」へのアイデンティティといった場合、C字の青年会のように、「字」というミクロな世界に関心がなくても、「沖縄」全体へのアイデンティティを持つ者がおり、それを契機に「字」の記憶に覚醒し、さらには覚醒した者が他の字住民を覚醒するケースがあることを忘れてはならない。つまり、大きな記憶の共同体と小さな記憶の共同体の相互作用が、地域のダイナミズムを作り出すのである。

参 考 文 献

- アルヴァクス, M 1989『集合的記憶』（小関藤一郎訳）行路社. Halbwachs, M., 1950, *La Memoire Collective*: Paris, P.U.F
- 伊藤幹治 1990『沖縄の宗教人類学』弘文堂
- 上地武昭 2003「戦後沖縄における集落自治と字公民館の展開」小林文人（共著）『東アジア社会教育研究』8号, pp. 136-156
- 北爪真佐夫 2000「沖縄における字と共同売店」新妻二男, 内田 司（編）『都市・農村関係の地域社会論』創風社, pp. 69-88
- 喜多村 正 1988「沖縄の遠祖御願」『南島史学』32号, pp. 10-31
- 小関 隆 1999「序章 コメモレイションの文化史のために」阿部安成・小関隆・見市雅俊・光浦雅明・森村敏己（編）『記憶のかたち コメモレイションの文化史』柏書房, pp. 5-22
- 小林文人・平良研一（編）1988『民衆と社会教育』エイデル研究所
- 小林文人・島袋正敏（編）2002『おきなわの社会教育』エイデル研究所

- 中村誠司 2000「沖縄における字誌づくり」新妻二男, 内田 司 (編)『都市・農村関係の地域社会論』創風社, pp. 89-99
- 浜 日出夫 2007「記憶の社会学・序説」『哲学』第 117 集, 三田哲学会, pp. 1-11
- 藤田真理子 2004「特集〈介護の人類学〉の序文」『文化人類学』70 巻 3 号, pp. 327-334
- 宮下克也 1996「記憶の刻印・喚起と自己確認—現代沖縄社会の金武御殿巡拝」『日本民俗学』206 号, pp. 66-98
- 2001「歴史の再構成と経験—人類学的歴史について—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 91 集, pp. 249-264
- レルフ・エドワード 1999『場所の現象学—没場所性を越えて』(高野岳彦, 阿部隆, 石山美也子訳), 筑摩書房. Relph, Edward., *Place and Placelessness*. Pion, 1976.
- 渡邊欣雄 1990『民俗知識論の課題』凱風社

資 料

『C 字誌』

註

- 1) 社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書 (2000 年) (旧厚生省社会・援護局)
- 2) 社会福祉法第 4 条 (2003 年) 地域福祉の推進
第 4 条 地域住民, 社会福祉を目的とする事業を經營する者及び社会福祉に関する活動を行う者は, 相互に協力し, 福祉サービスを必要とする地域住民が地域社会を構成する一員として日常生活を営み, 社会, 経済, 文化その他あらゆる分野の活動に参加する機会が与えられるように, 地域福祉の推進に努めなければならない.
- 3) 社協の HP には次のように紹介されている。「社会福祉協議会は, 民間の社会福祉活動を推進することを目的とした営利を目的としない民間組織です. 昭和 26 年 (1951 年) に制定された社会福祉事業法 (現在の「社会福祉法」) に基づき, 設置されています. 社会福祉協議会は, それぞれの都道府県, 市区町村で, 地域に暮らす皆様のほか, 民生委員・児童委員, 社会福祉施設・社会福祉法人等の社会福祉関係者, 保健・医療・教育など関係機関の参加・協力のもと, 地域の人びとが住み慣れたまちで安心して生活すること

のできる「福祉のまちづくり」の実現をめざしたさまざまな活動をおこなっています」。

- 4) 屋取（ヤードゥイ）集落とは、18世紀初頭以降、特に1871年（明治4）の廃藩置県後に首里や那覇の貧困士族が地方に移住し形成した集落を言う。士族は移住先でチジュウニン（寄留人）と呼ばれた。彼らにとって、屋取集落はあくまでも一時的な仮の住まいで、いずれは首里や那覇に戻ることを目指していたが、その願いはかなわずに定住することになった。
- 5) 渡邊欣雄の定義によると、門中は「父系出自をたどって互いに結ばれている人々からなり、その組織は家（ヤー）の男子規定・長男規定相続にもとづく家のハイアラキーを形成し、多くの分節・分家をかかえた排他的出自集団」である〔渡邊1990:69〕。
- 6) 沖縄では1899年（明治32）の土地整理事業が実施されるまで地割制度が続いたため、部落内の労働力確保が必要であった。よって、人員を消失する部落外婚に対しては厳罰が処せられた。
- 7) 役員は区長、副区長、評議員8名、審議委員十数名、監査委員3名評議委員の任期2年、綱引きの準備、盆踊りでは浴衣を着て誘う。
- 8) 中村によると字誌は1999年現在で412冊発行されている〔中村2000:92〕。
- 9) 字公民館の記録の上での活動停止であり、実際はその8～10年前くらいから活動をしていなかったようだ。
- 10) 「沖縄全島エイサーまつり」は、毎年旧盆明けの最初の週末に行われる、1956年の「コザ市誕生」を機に「全島エイサーコンクール」としてスタートし、今では沖縄の夏の風物詩として日本を代表する「まつり」の一つとなっている。本島各地から選抜された青年会などの団体や、全国の姉妹都市や協賛団体からのゲストが集結する。そして、初日にあたる金曜日にはコザ地区の各道で「道ジュネー」が行われる。そして土曜日が「まつり中日」日曜日が「まつり最終日」として、全島から集められた青年会のエイサー大会が沖縄市コザ運動公園で開催される。
- 11) 『沖縄大百科事典』『エイサー』の項〔沖縄タイムス1983〕
- 12) 沖縄各地のエイサーで最もよく使用される歌で親孝行を歌っている。
- 13) 地謡は青年団（会）を退団した者が担当する。
- 14) 聞き取り調査により、道ジュネーがノロ殿内から始まり東回りであったことはわかったが、残念ながら最終到着地点であるムラヤーまでの具体的道のは判明できなかった。
- 15) 『C字誌』と筆者の聞き書き調査による。

- 16) 青年会は、青年団時代から退団した年上の者たちを「先輩」と読んでおり、現在の再結成された青年会のメンバーも、活動が停止する以前の青年会に所属していた人々を「先輩」と呼ぶ。
- 17) 「園田エイサー・園田青年会公式サイト」ではエイサーの歴史や写真・動画などが紹介されている。掲示板ではエイサーの意見交換などがなされている。
<http://www.sonda-eisa.info/>
- 18) 小学校などでエイサーをやる時に馴染みのあるポップスなどを取り入れていることがあり、エイサーの曲を沖縄ポップスから選ぶことはC字青年会の特徴というわけではなく他の地区でもよくあることである。
- 19) 殿内（ドゥンチ）とは、琉球国時代の士族の門中の宗家そのものや屋敷を指す。
- 20) 喜多村は、こうした宗家への志向性やその顕在化した形態である参拝を「自らの存在を、あるいは自らを仮託させている集団の存在を、より高い、より正統な実体たらしめようとする沖縄独自のアイデンティティの発露」と見なしている [喜多村 1988:29]。
- 21) 地元の社会福祉協議会が開催している。字は無償で公民館を提供している。
- 22) アパートや団地の賃貸住宅暮らしの若い家族は、子供が就学するまでに定住地を決めたい考える傾向が強い。
- 23) この話は夏祭り当日にHさんと偶然会って聞いたものである。以前より子育てサロンの調査をしていた筆者はHさんとは知り合いであったが、彼女たち家族が夏祭りに来ることは知らなかった。